

二六、個人及び個人主義

ルクリュは個人及び個人主義をどう見たか。無政府主義が個人及び個性に重要性を認める點に於てマルクスの共產主義と全然對蹠的地位にあることは何人も知るところである。

『アナルシストに従えば、政權の獲得は、その政權の持續を長びかせ、奴隸制度を長びかせることにしか役立たない。されば消極的意味をしか持たない「アナルシスト」という名稱が、一般に吾々を指示する名稱となつたのは理由のないことではない。……吾々の本質的特質は總ゆる官製權力との鬭争にある。吾々は各個人を世界の中心であると見る。そして各個人は完全な發展に就て同等の權能を持つ』（無政府主義）というルクリュの講演の一節によつて、彼の思想はわかるであらう。

『平和及び自由の同盟』第二回大會（一八六八、ベルンに於ける）に於て、連合主義の提案者として彼がなせる演説は、彼自身も自信を持つたものであるが、その中に次の如き一節がある。

『愛國狂者の古びた「祖國」や、封建的な「州」や、專制の道具たる「府縣」や、中央集權者の發明たる現在の「カントン」や「コムミュン」を破壊して了えば残るところのものは個人である。そしてその個人こそ相互の了解に従つて結合すべきである』パン・デストラクシヨンの後に残つた自然人こそ新しい建設に進むのである。

更にパンフレット『アナルシイ』中に次の如く言つてゐる『尊敬心の減少は現代社會の特徴ではないか？……卑陋俗惡化の事例も少くはないが、平等の方面には進歩がある。人はその尊敬心を表明する前に、その人間または制度が眞に尊敬すべきであるか否かを考える。個人の價值とその仕事の重要さとを研究する。權勢に對する信仰は消滅した。その信仰が消滅すれば次で制度も消滅する』一切の傳統的精神や制度を否定して赤裸々なる自然人に歸り、しかる後に一切の事物の價值を評量する。個人はその出發點である。

しかし彼は個人的無政府主義者ではない。ジョルジ・ルナールという人からその著『自由社會主義と無政府主義』という書の寄贈を受けた時、その返書中に次の如く言つてゐる『共產的無政

主義者または集産的無政府主義者は、人間を一個人であると同時に社會的存在であると見る。さう言い得ないアナルシストは「唯われ獨り！それで充分だ」という個人的無政府主義者のみである。それは極めて少數で、また彼等と吾等との類似點はただその名前のみである』『また私は人生というものを研究したり、あらゆる無政府主義團體の自然的發動を吟味したりして、吾々の自發的組織には極めて能く諸種の力の配合が實行されることを立證した。且つその諸力の配合は吾等の自由を減少したという印象を與えるどころか、却て自由を百倍したという愉快な感激を與える。吾等はその個人の力の無限小なるに比して無限大の綜合的力を持つことによつて遙かに優越せる個人になつたように感じる……若し少し無作法な人間があつて、この自由集團の美事な秩序を亂さうとするようになると、私は深い反感を懷く』『要するに、その組織は、その中に個人的傲慢や強權的暴戾が伏在する程度に於て常に失敗であり、退歩的である』

強者が弱者に對して暴戾なる場合、彼は言う『若し私がそれを防護すべく充分強ければ、私はそれを防護する。私は總ての弱者に對してさうする義務がある。だが、若し力を禁止する方法として力が許されるとして、その力を用いる時機を決するものは誰であるか、との反對があるかも知れない——誰か？ 勿論それは私だ。私は理性と良心とを持つてゐる』連帶責任觀に基く防護

と復讐との限界は精確に判る。『最強力者であり、そして愛をして物言わしむべくその強力を役立たせることは、無政府主義者の規範的行動である』

彼は『地人論』の序文中に社會進化に及ぼす個人努力の重要性を説いて『諸民族生活の如何なる進化も個人的努力によらなければ創造されるものではない』といい、更に第六卷の結論に及んで次の如く言っている。

『されば吾々の解する幸福とは單なる個人的快樂ではない。勿論「各人は各自の幸福の建設者だ」という意味に於て、それは個人的ではあるが、しかしそれは人類全體にまで押し廣げなければ、眞實にして、深遠にして、且つ完全ではない。即ち、人間がその意義を了解する一事業に就て他の人間と團結し、そして結果のわかつている手段を遂行すれば——悲痛事や、災難事や、疾病や、死や避け難いとしても——自分が幾億萬分一というほど無限に小さい細胞に過ぎない個人として屬する大人類體を善い方に向わせ得るといふ確信を持ち得るのである』

以上によつてルクリュの個人觀はほぼ察せられるであらう。

二七、君主制及び共和制の起源

君主制はどうして起つたか？ 世界の多くの地方に於て、或る程度に文化が發達したところでは、大い君主制が一度は行われる。人類は君主制を好むのか？ 或は好むと好まざるとに係わらず、強者の權利として行われるのか？ その強者をも敬し讚美する人情は人類自然性の發露とは言えないか？ 是等の點に就て、エリゼ・ルクリュの説くところを、『地人論』中から摘録しよう。

戦争はその結果から云えば、人類間に於ける最も恐るべき不平等の作因である。他の者よりも強くして輕捷であり、巧妙であり、狡猾であつて、長老及び慣習に對して、當然拂うべき傳統的尊敬を顧慮すること少なき若き戰士は、常に戦争に従事している間のみならず、更に又、休戦及び平和の時代に於て、永續的に、同輩に抜んで首長として認められる絶好の機會を持つたので

ある。このことは、君主政治、換言すれば、權利として、また事實、法律を超越せる唯一者による支配に於て、決定的形態を成したところの制度の發端であつた。謂わば多くの双葉のルイ十四世が「太陽王」に先驅したのである。

グムブローヴィッチが極めて正當に指摘したように、君主政治は、人類と同じく古いものである。それは、人類よりも古くさえある。その故は、君主政治は、動物世界に於て既に存在していたからである。多くの人間の制度と同じく、この君主政治も、吾々の祖先即ち、草原及び森林中の動物の間に生れた。即ち、多くの動物の群は、寓話の物語っているように、その王を有していた。特に或る種の猿は、認知された首長を有して、これを取巻く一族の他の猿は、首長の肉體的力、腕力、咬む力に對して、尊敬を拂わねばならないのである。同じような感情は何れも類似的の結果を生み、幾多の年月を経る間に、時代とともに、動物的祖先から人間的相續者に移つて、隔世遺傳的性質に従つて、常に慣習が成立した。

なお又、思想の媒介たる言語は、明らかに、王權の由來を示す。殆んど總ての人間の言語に於て、首長または貴族に與えられる稱號は戦争に關する事實から生れたものである。empeur (皇帝) は戦争を指揮する者であり、dicateur (獨裁者) はその兵卒に命令を強行する者であり、

maréchal (元帥)、sénéchal (家令)、connétable (佛國古代の元帥—譯者) は騎兵の指揮に當るものであり、duc または herzog は軍隊を指揮するものであり、jarl または earl は力優れて強き人であつて敵を打ち殺す勇士であり、chevalier (騎士)、ecuyer (侍臣)、valet (侍僕) は相並んで戰闘に加わる者であつた。しかしながら、若干の稱號は、單に、一般的に、或は平時、或は戰時に於ける、支配の事實を示すのみである。「王」なる稱號の如きこれである。ヂェルマン民族の言語に於ては、Koning, King, Koning の語は、智能や高等の學識上に權威ある者にさへも與えられている。既に家臣はその主君の前に屈服する。それは、かなり久しい以前から宮臣となるために、隸屬せらるるものの子孫なのである。

君主政治は、人間自體が犬やその他の多くのものと同じく、「馴化し得る動物であるだけに、人間に於て、一層に鞏固となることが出來た。或は阿諛追從によつて、或は威嚇によつて制御せられ、次いで、慣習によつて、隸屬狀態のままに置かれていた人間は、意力を有する者によつて、その力と生命とを取られるにまかすものである。しかし、人間は、その人格の威嚴は拋棄するにしても、依然として、愛情や尊敬及び畏敬の念を有する以上、人間である。そして、人間は、自分の誇りを奪いとつた者を却つて他の總てのものよりも愛し、尊敬し、畏敬するに至るこ

とが多い。「平伏する犬」は自分を打ち辱しめる主人の足下に匍匐する。

かかる服従と人格的諦めの精神は、かくも多数の社會に君主政治の發生を許し、また歴史の過程に於て、多數の人間が、その同類の一人の通路に埃にまみれて平伏することを喜んだところの、かの名高い帝國の建設を容易ならしめたのであるが、かかる精神が發生し發展したのも古代の世界に於ける人間の所爲である。君主の出來心のためにも生命を失つた人達が、或る合圖によつて自分を死に至らしめた者に向つて、最後の敬禮を捧げたことは、そも幾度であらう！

Caesar, morituri te saluant! これは絶望の果の皮肉では斷じてなかつた。それは實に、最後の讃仰行爲であつたのである。パオ群島の一小國に於ては、首長は、*Head* 即ち「死」なる稱號を有している。即ち、何人も死ぬことなしには、首長を見ることは出來ないのである。

模倣せんとする性向も亦、人類界に君主政治の精神を發達せしむるに、最も與つて力のあつた自然的現象の一である。即ち、弱き者は強き者に、貧しき者は富める者に、醜きものは美しきものに、そして、美しきものは最高權者となつた醜惡な者にさえ、倣うことを好むのである。

それ故に、自發的模倣行爲が、次第に、法律や義務として定められたことは、避けがたいことであつた。威力が鞏固に構成されているところに於て、如何なる家臣と雖も、君主に倣うの義務

を敢えて忌避するものがあるか。従つて、模倣は、人民全體に尊重されることとなるのである。そして、かかる模倣が、徐々に變化して、一種の無感覺となり、言語、思想は、益々卑屈となるのである。

例えば、フィジー諸島に於ては、首長が凹凸のある畑道で轉んだ場合には、その従者もすべて轉んだ風を装う。そして、もし、ただ一人の者が立つてゐる場合には、その者は、無禮者及び謀反人として、直ちに、その同輩の者から打たれるのである。これと同じく、年老いて衰弱した「ベルシャの王」が、寄る年波を嘆いた場合には、如何なる侍臣と雖も、彼と同じく、衰弱して身體が大儀であることの功德を求めないものがあつたらうか。もし王妃が不幸にして、醜いときには王妃の醜さに似ることが、大きな美となる。王妃が不具であるときには？ 夫れに似た不具を装えば、よいのである。

しかし人間の自然的社會生活の中には共和制の萌芽を示す多くの實例を發見する。それには、自然的又は地理的環境が非常に重要な關係を持つてゐる。その事に關しても、再びエリゼの『地人論』から次の特殊な一節を借用しよう。

人口が極めて稀薄にして、通過の困難な谿谷や、屢々氷雪の阻塞する岩丘の峯やを限界としたところの餘り廣からぬ谷間ごとに、微力な共同體を成して散在する山國を例に採らう。これ等の閉塞された小世界にあつては、各自が環境の條件そのものによつて定められた仕事を持つており、日々の仕事は完全に履行される。……岩丘が險阻であり、道が不可開である場合は防禦は容易である。そして、かかる障礙物もお敵がこれを攻撃するのを防ぎ得ない場合に於ても、山國人が採るべき戰術は、些かも複雑することなく、その小さい祖國の利益の爲にその戰術を單一の首長に任せるような必要は起らない。各個人は、その慣習や生活の仕方にもとずいて、自然に自分を信じている。即ち各個人は、『同輩中の第一人者』や、總ての者から最も勇壯なもの又は最も狡猾なものと認められた闘士やと、よく談合することができる。そして、そのこと自體が、その闘士にとつては、公共の危機に際して若干有効な權力となるが、平時に於ては、輿論はその權力を認めず、従つて、何等の効力も無いものである。指揮の危險が、甚だしく重大な性質を帯びるのは、山國人の諸部落が低い平原を征服し、そこに帝國——そこで彼等は、忽ちその風習を變じ、周圍にある一層文明の開けた民族のうちに解消してしまふ——を建設するために大舉して高所か

ら降下する場合に限られている。

ヒマラヤ及びヒンドウ・クッシ谿谷、スツエチウエン、コーカサス、アルプス、ピレネー、南部アルプス等の谿谷は、幾千年のあいだ存続したところの、かかる小地方的民主政治の極めて多くの例を提供しており、そのうちの若干は、近代的形態を以つて存続した。マラッカ半島、及びインドやマレイの大きな島々、海南の支那領諸島、及び臺灣の日本領諸島にあつては、その内部地方に於いて、山背を四方に延ばして、その間に谿谷を狭む群山を存するのであるが、そこにもまた、共和政治を行ふ民族が住んでいるし、少なくとも、曾ては住んでいた。

自然的社會生活を營む民族にあつては或は君主制を建てるものがあり、或は共和制、民主制を建てる場合があるが、それは何れの場合に於ても、自然的又は地理的環境の影響によつて決定されたのである。